

# 大学生のコミュニケーション能力とキャリア意識

平尾元彦  
重松政徳

## 要旨

大学生のコミュニケーション能力を、聴く力・観る力・感じる力・質問する力・伝える力の5つの力に分解して、山口大学の学生アンケート調査に基づき計測した。キャリア志向の観点からはスペシャリスト系の学生が、パーソナリティの面からは論理的・能動的な学生のコミュニケーション能力が高いことが計測されるなど、大学生のコミュニケーション能力の自己評価とキャリア意識との関係が明らかになった。

## キーワード

コミュニケーション能力，キャリア教育，キャリアアンカー，パーソナリティ

## 1. はじめに

社会人として必要な能力のひとつにコミュニケーション能力があり、企業が新卒採用の学生に期待する能力のなかで、この力は常に上位に位置づけられる。学生たちがのぞむ採用試験では様々な方法でこの力のチェックがなされ、グループディスカッションや課題プレゼンテーション、作文・論文試験、さらにはセミナー会場での聞く態度、グループワークでの取り組み姿勢のチェックなど、この力を評価する試みがなされている。

コミュニケーション能力は、企業・官公庁など組織で働くために、また、個々人がより豊かなライフキャリアを歩むために大切な力ではあるが、この力を高めるための学校教育の取り組みは、これまで明確でなかったことも事実であろう。小学校から大学まで学校教育の各段階でのキャリア教育が求められるなかで、コミュニケーションの理解と能力向上のための教育プログラムの開発は、大学教育の課題ともなっている。

そもそも大学生のコミュニケーション能力はどのようなレベルで、個々人の性格や考え方によってどのような違いがあるのだろうか。大学におけるコミュニケーション教育の検討にあたり、まずは現状を把握する必要があるだろう。本論文はこのような問題意識のもとに、山口大学の学生に実施したアンケート調査に基づいてコミュニケーション能力の計測を行い、キャリア意識との関連をさぐることで、実態を明らかにしていきたい。

## 2. コミュニケーション能力の計測

### 2-1 コミュニケーション能力の自己評価

コミュニケーション能力とは非常に幅広い概念であり、外国語の理解や大勢の前でスピーチする力など様々な文脈で用いられるものではあるが、ここでは、いわゆる社会人基礎力、働く力としてのコミュニケーションの力を議論する。

企業が求めるコミュニケーション能力とは、ビジネスの場面で適切な意思疎通ができるこ

とであり、信頼関係を築くことのできる能力である。情報を伝達するだけでなく感情を理解する能力として、ここではとらえたい<sup>1)</sup>。山口県若者就職支援センター(ジョブカフェ山口)が若年者対象のセミナーで用いるテキストの冒頭には「仕事とは常に誰かと一緒に進めていくものだ」という考え方に立てば、広く人間関係を展開していくためのコミュニケーション能力は社会人としてなくてはならないものなのです」との記述で、その重要性を語る。とりわけ学校から職場へと移行していく若者にとって、同世代に限定された人間関係から多世代の関係へと変化することへの戸惑いも大きい。コミュニケーションは価値観や立場の異なる人々とのよりよい人間関係構築のための方法であり、キャリア形成の観点からこの能力を高める方法論が求められる。

では、実際に若者たちのコミュニケーション能力はどの程度のもので、どの部分に問題があるのだろうか。まずは実態を把握する必要があることは当然であるが、現実にはコミュニケーション能力を評価することは難しい。一人ひとりとコミュニケーションをとりながら判定する方法もあるが、その場合であっても、その場面・その瞬間で発揮された能力にすぎない。たとえば語学検定は外国語のコミュニケーション能力を判定するためのツールであるが、この方法論は今回の目的とは異なる。ここで必要な計測手法は、知識や言語力を問うものではなく、行動・意識の実態を把握するもの、広く人間関係構築力をとらえるものでなければならず、この観点からの計測手法の開発が求められている。

本研究は、大学生のコミュニケーション能力を計測しようという試みであり、そこから特徴的な傾向を導き出し、教育的課題を抽出しようとするものである。よって、アンケート調査によるコミュニケーション能力計測の方法を試みる。これは自分自身のコミュニ

ケーション能力をどう思っているかという意識調査であり、あくまでも自己評価である。他者からの印象や行動を評価しているわけではないこと、実際にできるかどうかを確認しているものではないことに、注意しておきたい。

ここでは、本田勝嗣の手法に基づき、コミュニケーション能力を「聴く力」「観る力」「感じる力」「質問する力」「伝える力」の5つの力に分解する<sup>2)</sup>。そして各能力に関する5つの質問を準備して、回答者に自身の状況を評価してもらうこととした。

## 2-2 アンケート調査の実施

調査は、山口大学において高学年向けの共通教育科目として開講する総合科目「キャリアと就職」受講生に対して行ったもので、吉田キャンパス(人文・教育・経済・理学・農学部)の学生には2006年4月、常盤キャンパス(工学部)の学生には同年10月に実施した<sup>3)</sup>。また同科目には教育学部の受講生が少ないことから、別途7月に同学部の専門科目の受講生と同じ調査を実施をした。有効回答数は633人で、男子学生50.1%、女子学生49.0%、性別無回答が0.9%と男女ほぼ半々、学年はほとんどが3年生(91.0%)である。学部別の内訳は以下のとおりである。

人文学部	89 (14.1%)
教育学部	79 (12.5%)
経済学部	173 (27.3%)
理学部	151 (23.9%)
工学部	53 (8.4%)
農学部	88 (13.9%)
合計	633

アンケート調査票には、個人属性ならびに進路希望、性格、キャリア感などに関する質問項目とともに、表1に示す25の質問をして、3段階で回答を求めた。633名の回答それぞ

れに、あてはまる＝2点、ややあてはまる＝1点、あてはまらない＝0点を与え、ごく少数の無回答は0点として集計し、各能力の得点を計算した。したがって、5つの能力それぞれに、すべて「あてはまる」場合は10点、すべて「あてはまらない」場合は0点となり、各自の得点はこの間に分布する。質問に対する各選択肢の回答割合、および、全回答者の平均得点は表1に示すとおりである。

5つのコミュニケーション能力の得点合計をその個人の総合得点（50点満点）とすると、平均値は25.6でほぼ中央に位置し、図1に示すようにおおむね左右対称の分布となっている。5つの能力別の度数分布を図2に示す。ほぼ平均値を中心に山型の図となっているが、観る力はやや右よりの高得点者が多く、質問する力はその逆に分布する。また、伝える力・聴く力は中央近くの山が高く回答が集まっているなどの特徴がみられる。

聴く力は、話し手の言葉を聴くのと同時に「心の動きを聴く」ことのできる力と理解される。平均得点は5.50（10点満点、以下同じ）。相づちを打つようにしていることので得点が高い反面、周囲の人が話しかけやすい雰囲気や心掛け実践していることので得点はやや

低い。

観る力は、相手が今どのような状態にあり、何を考えているのかを理解しようと、心を配る力である。平均得点は6.00で、5つの力のなかで最も高い。

感じる力とは、相手がどう思っているのかを常に意識をし、相手との距離を感じとりながら近づこうとする能力である。平均得点は5.45で、相手に誤解を招かない表現をする、相手の気持ちに共感する項目の得点が高い。

質問する力は、言葉によって相手との適切な関係をつくるとともに、相手の気づきを促進して次の行動を働きかけることのできる力である。他の力と比べて「あてはまる」とする回答は少なく、尋ねるとき肯定形を使っている、つまり Why ではなく How を使った質問ができているとする項目の得点は低い。平均得点3.91は5つのなかで最も低い力となった。

伝える力は、相手が話すことに対して効果的に返して関係強化を図る力であり、反射や要約のスキルはこの力に含まれる。質問間のバラツキは小さく中央に回答が集まっている。平均得点4.69、質問する力に次いで低い項目となった。

図1 コミュニケーション能力総合得点の分布

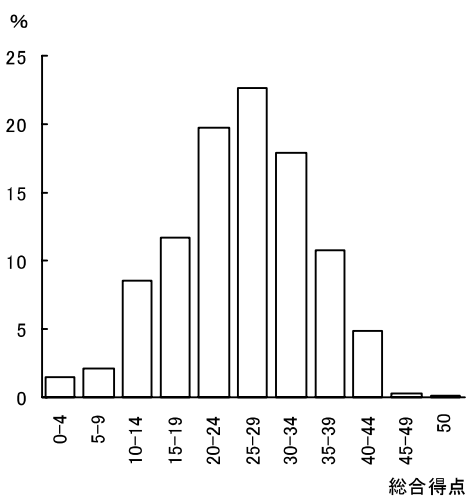


図2 5つの能力得点の分布

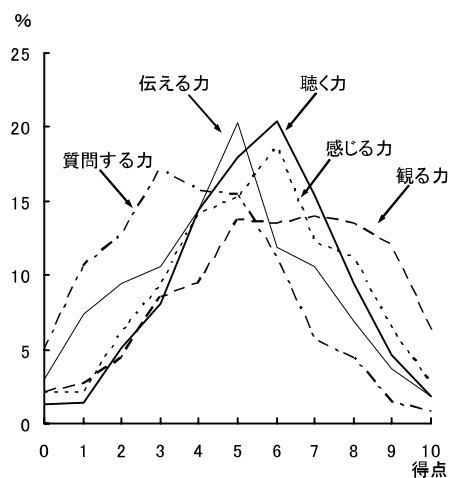


表1 コミュニケーション能力評価のための質問項目・回答割合および平均得点

		構成比(%)				平均点数
		あてはまる	ややあてはまる	あてはまらない	N A	
聴く力	1. 普段から、周囲の人が話しかけやすい雰囲気を感じ、実践している	19.9	43.4	36.3	0.3	0.83
	2. 話を聞く時には、手を止めて、身体を相手の方へ向けている	27.6	57.5	14.5	0.3	1.13
	3. 相手が話す速さに合わせて、相づちを打つようにしている	51.8	40.1	7.4	0.6	1.44
	4. 「でも」「どうして」というような、否定する言葉で話の腰を折るようなことはしない	22.3	48.0	28.9	0.8	0.93
	5. 「なるほど!」「大変だったね!」というように、共感をあらわす言葉がタイミングよく出てくる	33.8	49.9	15.8	0.5	1.18
5.50						
観る力	6. 会話をする時には、相手の表情の変化を見るようにしている	57.2	33.3	9.2	0.3	1.48
	7. 相手が話をしているときの、しぐさに注意を払っている	38.5	39.2	22.0	0.3	1.16
	8. 普段の相手の身だしなみに変化があれば、気づくことができる	30.6	43.9	24.8	0.6	1.05
	9. 相手の理解度を推しはかるために、返事の反応にも注意している	40.1	45.2	14.2	0.5	1.25
	10. 相手が発言しているときは、どのような気持ちで話しているのか想像しながら聞いている	26.7	52.3	20.4	0.6	1.06
6.00						
感じる力	11. 言葉を表面上だけでとらえずに、なぜ、その表現になったかを考えるようにしている	22.3	44.4	33.0	0.3	0.89
	12. 自分の行動が、相手にどのように影響するかを、常に考えている	33.0	50.1	16.6	0.3	1.16
	13. 発言するときに、誤解を招かないように(正しく理解してもらうように)相手によって表現を変える工夫をしている	39.2	43.0	17.5	0.3	1.21
	14. 相手の心理状況をくみ取った行動ができる	17.5	58.3	23.7	0.5	0.93
	15. 悩みを抱えた人に対して、「大変である」「つらい」という気持ちに共感することができる	38.5	48.7	12.5	0.3	1.26
5.45						
質問する力	16. いつでも、誰にでも、合わせられるように、話題のストックを持っている	12.8	34.9	52.0	0.3	0.61
	17. OPEN QUESTION と CLOSED QUESTION を、状況に応じて使い分けている	14.5	43.3	41.7	0.5	0.72
	18. 疑問に思った点は、相手の話がひと段落ついてから、尋ねるようにしている	27.2	47.7	24.2	0.9	1.02
	19. 尋ねるときは、肯定形を使っている(なぜ、できないんですか→どうすれば、できると思いますか)	9.3	37.4	52.9	0.3	0.56
	20. 質問は、1件ずつしている(矢継ぎ早に、聞かない)	25.4	48.8	24.8	0.9	1.00
3.91						
伝える力	21. 情報を伝えるときには、相手に合わせた事例を引用する事で理解を深めるようにしている	20.4	52.1	27.2	0.3	0.93
	22. 重要な点は項目に分けて、1つずつ伝えている	20.7	53.2	25.8	0.3	0.95
	23. 事実を伝える事で、本人に気づかせるようにしている	22.1	53.2	24.2	0.5	0.97
	24. 相手が話した言葉を、そのまま返す事で話の内容を確認している	22.4	52.1	25.1	0.3	0.97
	25. 最後に要約して伝える事で、思い違いのないようにする工夫をしている	20.7	45.8	33.2	0.3	0.87
4.69						

注) CLOSED QUESTION とは、「はい」「いいえ」で答えられる質問の仕方。OPEN QUESTION とは、それ以外の答えが想定される質問。

表2はこの5つの力の相関係数であり、いずれも正の相関を示している。感じる力と観る力の相関が高く、観る力と伝える力、聴く力と伝える力の相関がやや低いといった点での特徴がみられる。

表2 コミュニケーション能力得点の相関係数

	聴く力	観る力	感じる力	質問する力	伝える力
聴く力	1.0000				
観る力	0.4970	1.0000			
感じる力	0.4711	0.5805	1.0000		
質問する力	0.4776	0.4422	0.4563	1.0000	
伝える力	0.4382	0.4357	0.5112	0.5407	1.0000

ここで計測されたコミュニケーション能力の得点について、回答者の属性・意識による違いを見ておきたい。個人々による違いは当然あるが、全体の傾向をとらえるために、以

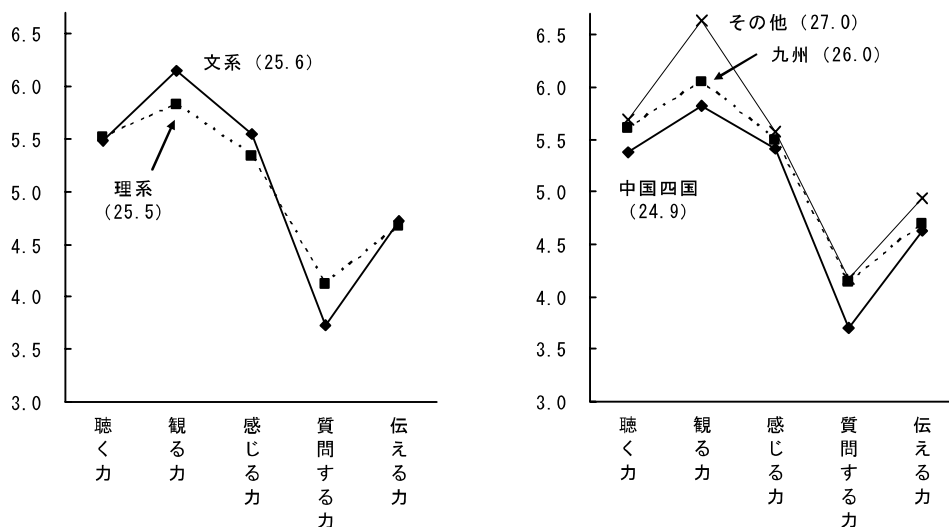
下の分析ではすべて平均値で議論する。

### 3. 個人属性・進路希望とコミュニケーション能力

まず、コミュニケーション能力の得点を個人の属性および進路希望の点から見ていきたい。総合得点を学部別にみると、教育学部(26.7)がもっと高く、人文学部(26.6)、理学部(26.4)が続く。文系・理系別には、文系がやや高いものの顕著な差があるというわけではない。5つの力で違いがあらわれているのは、観る力・感じる力は文系の学生が高く、質問する力は理系の学生が高いというところである。

出身地別には、山口県を含む中国四国出身の学生よりも九州の学生の得点が全体的に高く、さらにその他地方出身の学生の得点が高い。ここには東京や大阪など大都市圏出身の学生も含まれる。生まれ育った地域の特性からなのか、遠方から大学に来るといった個性

図3 学部・出身地とコミュニケーション能力得点



- 注) 1. 図の( )内はコミュニケーション能力総合得点  
 2. 回答者633人を、文系(341)・理系(292)、中国四国(340)・九州(210)・その他(83)にそれぞれ区分して集計。なお、中国四国のうち73.2%は山口県・広島県、九州の58.6%が福岡県出身者である  
 3. 所属学部の文系は人文・教育・経済、理系は理学・工学・農学の各学部である

が影響するものなのかは定かでないが、自己評価の差は明確に示される。一般に、近隣の学校に進学する、あるいは職場に勤める場合は、これまでの人間関係の近くにいること、さらにそこでの人々とも文化・風土が共有化されることからコミュニケーションがとりやすいという面はあるだろう。逆に言えば、コミュニケーション能力が高くなくともそこそこやっていける世界がそこにあるのかもしれない。一方で、単身知らない地に乗り込んで新たな人間関係を構築していくためには、そ

れなりのコミュニケーション能力が必要とされ、この環境が遠方からの学生の能力を高めているのかもしれない。もしそうであれば、地元出身学生には、いっそうのコミュニケーション力強化プログラムが必要であるとも考えられる。

次に進路希望別にコミュニケーション能力得点をみておきたい。アンケート調査票には次の表現で進路希望を調べた。各項目への回答と割合は以下のとおりである。

Q 大学卒業後の進路として、あなたの現段階での考えに最も近いもの1つ選んで番号にをつけて下さい。

1. 地元(出身地)の民間企業に就職 116(18.3%)
2. 地元(出身地)にこだわらず民間企業に就職 263(41.5%)
3. 地元(出身地)の官公庁・公的機関に就職 56(8.8%)
4. 地元(出身地)にこだわらず官公庁・公的機関に就職 38(6.0%)
5. 地元(出身地)の学校教員として就職 49(7.7%)
6. 地元(出身地)にこだわらず学校教員として就職 17(2.7%)
7. 大学院・その他の学校に進学 87(13.7%)
8. 進学も就職もしない 2(0.3%) N.A. 5(0.8%)

5つの能力別の平均得点を図4に示す。全体的に教員志望の学生の得点が高く、公務員志望者の得点が低いということがはっきり見てとれる。教員志望の学生には対人関係について学ぶ機会があることや、教育実習など実践の機会もある。対人サービスである教育の仕事志向することからもともとコミュニケーション能力の高い集団なのかもしれない。対人能力が求められる仕事という意味では公務員も同様のはずであるが、このグループは全体的に得点が低い。とくに観る力・質問する力に大きな差がついており、相手の感情を理解して、言葉によって相手とよい関係をつくっていくという面でのコミュニケーションの力がやや弱い集団ともなっている。このほか、進学希望者は他に比べて、観る力・質問する力の得点が高いことが特徴的である。

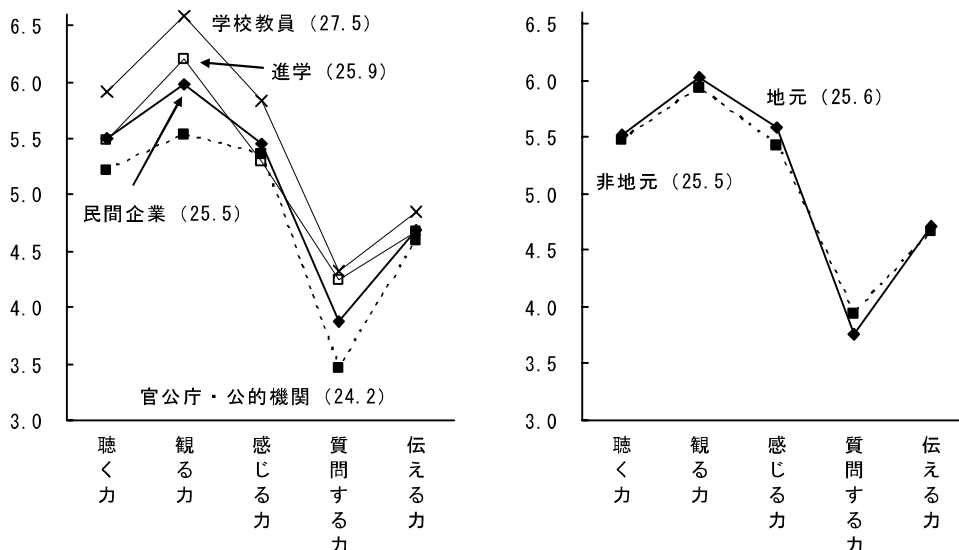
企業・公務員・教員志望者には、地元(出身県)希望かどうかあわせて尋ねている。

ここでは地元を選ぶ学生の得点がやや高いものの、両者の間にはあまり大きな違いは見られなかった。

#### 4. キャリア志向とコミュニケーション能力

学生個々人のキャリアに対する考え方とコミュニケーション能力の関係をみておきたい。ここではキャリア志向(働くイメージや求める方向性)として、シャインによるキャリア・アンカーの8つのカテゴリーに基づき、表3の項目のなかで自分にあっていると思うもの1つを選択することを求め、キャリア志向(価値観)を判定した<sup>4)</sup>。

図4 進路希望とコミュニケーション能力得点



注) 1. 図の( )内はコミュニケーション能力総合得点  
 2. 進路希望を回答した626人を民間企業(379)・官公庁公的機関(94)・学校教員(66)・進学(87)に、また、そのうち就職を希望する539人を地元(221)・非地元(318)にそれぞれ区分して集計

表3 キャリア志向の分類と回答割合

	回答数	割合(%)
1. 自分の能力や才能をいかし、常に仕事に対して挑戦的な 【スペシャリスト系】	157	24.8
2. リーダーシップを発揮し、責任ある地位につき組織をまとめる 【ゼネラルマネージャー系】	17	2.7
3. 自分のやり方、自分のペース、自分の納得する仕事を標準に考える 【自律系】	156	24.6
4. 安全で確実と感じられ、将来を予測する事が可能な 【安定系】	79	12.5
5. 新しい製品や新しいサービスを開発したりして経済的に成功する事が大切な 【起業家的創造系】	15	2.4
6. 能力よりも世のため社会のためという価値観を優先に考える 【社会貢献系】	49	7.7
7. 競争社会で勝ち抜く事がすべてであり、不可能を克服する 【挑戦系】	7	1.1
8. 働く事とプライベートな時間など、柔軟で調和を重んじる 【生活バランス系】	147	23.2
N.A.	6	0.9
合計	633	100.0

今回のアンケートを回答した633人の価値観をみると、スペシャリスト系・自律系・生活バランス系が各4分の1を占め、安定系・社会貢献系が続く。上位5つの価値観(キャリア志向)別にコミュニケーション能力の平

均得点をみたものが図5である。スペシャリスト系が全体に高く、総得点も高い。このタイプの特徴には、上昇志向の強さがある。自分の能力を常に高めることを考え挑戦していくタイプであり、キャリアアップのためのコ

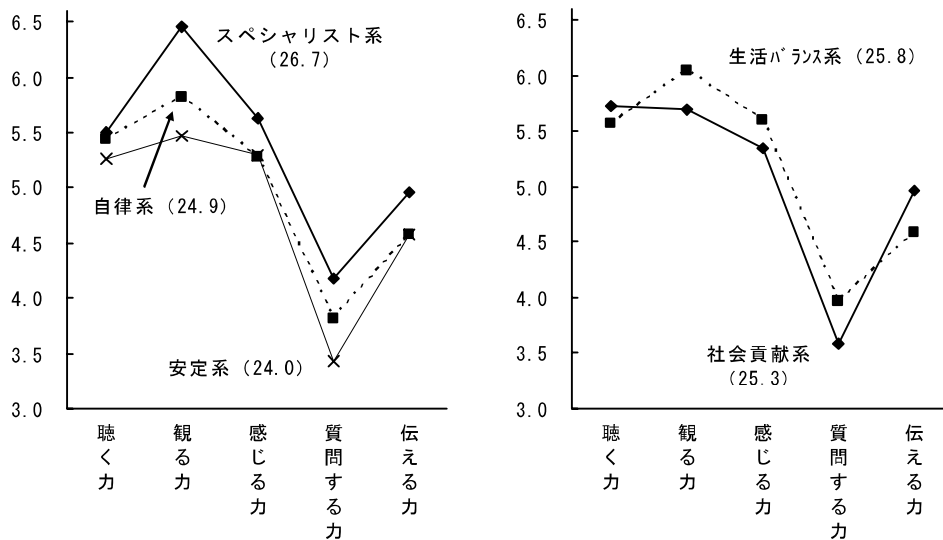
コミュニケーションの重要性を理解している学生も多いと思われる。もちろん実際にできるかどうかは別であるが、このような向上心がコミュニケーション能力の高い得点をもたらした可能性はある。また、この価値観の持ち主の聴く力は相対的に低いという面も計測される。傾聴トレーニングなどを実施して自覚を促すことも必要であろう。

安定系・自律系は総じて力が低い。両タイプは、自分らしさや安心を求めるタイプであり、自己世界の確立を重視する。今の状態を維持することが重要であって広く人間関係を構築していこうという志向は強くないものと

思われる。コミュニケーションスキルを強く求めないことが、低い得点につながっているものと判断できる。

このほか、生活バランス系は全体に平均的、社会貢献系の学生は聴く力・伝える力が高いものの質問する力が低いなどの特徴がみられる。個々人のキャリア志向によってコミュニケーション能力はやや異なることが示されており、この結果を活用すると、同じ価値観を持つ人を集めたグループで弱い部分を強化する取り組みや、意識的に価値観の異なる人々のグループディスカッションによって自分の課題を認識させるなどの展開も考えられる。

図5 キャリア志向とコミュニケーション能力得点



注) 1. 図の( )内はコミュニケーション能力総合得点  
 2. スペシャリスト系・自律系・生活バランス系・安定系・社会貢献系それぞれに分類される人数は表3参照

### 5. パーソナリティとコミュニケーション能力

続いてパーソナリティとコミュニケーション能力の関係のみておきたい。人の性格を計測する手法には様々なものがあるが、ここでは、人間はいくつかの個性(SP:スーパー

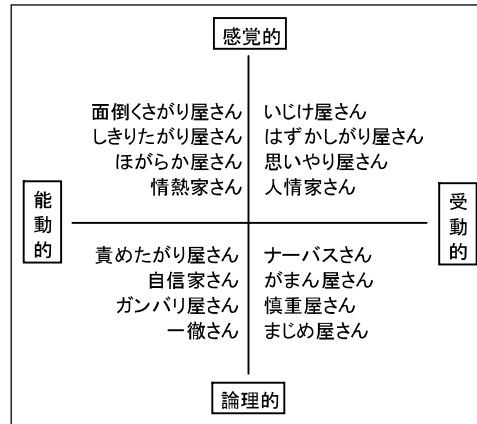
ソナリティ)を持ち、それらは感覚的・論理的、能動的・受動的の軸で整理できるというYAO教育コンサルタントの理論に基づき計測する<sup>5)</sup>。同社のSPトランプ全52枚のなかから図6に示すパーソナリティを示す16の言葉を提示して、回答者にはこのなかから自分にあうもの3つを選ぶことを求めた。自分



で自分のタイプを選ぶという意味でパーソナリティの自己理解を表明するものである。回答者にこの言葉がどこに分類されるかはわからないようにして、自由に選んでもらっている。人には様々な面があるため、例えば感覚的なものと論理的なものを両方を選ぶ可能はあるが、この場合は多い方に分類した。

この結果をみると、感覚的より論理的の方が総合得点は高く、5つの能力いずれも論理的な性格を持つ学生の方が得点が高いことが明らかになった。論理的なパーソナリティを持つ人は、目的志向の傾向がある。何かの目的のために何かをするという論理的発想をするタイプであり、目的達成の手段としてコミュニケーションをとらえる。主体的に行動してコミュニケーションをとる必要性を理解し、スキル向上への意識も高いタイプである。一方で感覚的なタイプは、自分がその人を好きか嫌いかが判断基準となる傾向が強い。このタイプは新たな関係を構築していくことにはあまり熱心ではなく、自分のコミュニケーションスキルが高いか低いかにさほど関心

図6 パーソナリティの分類

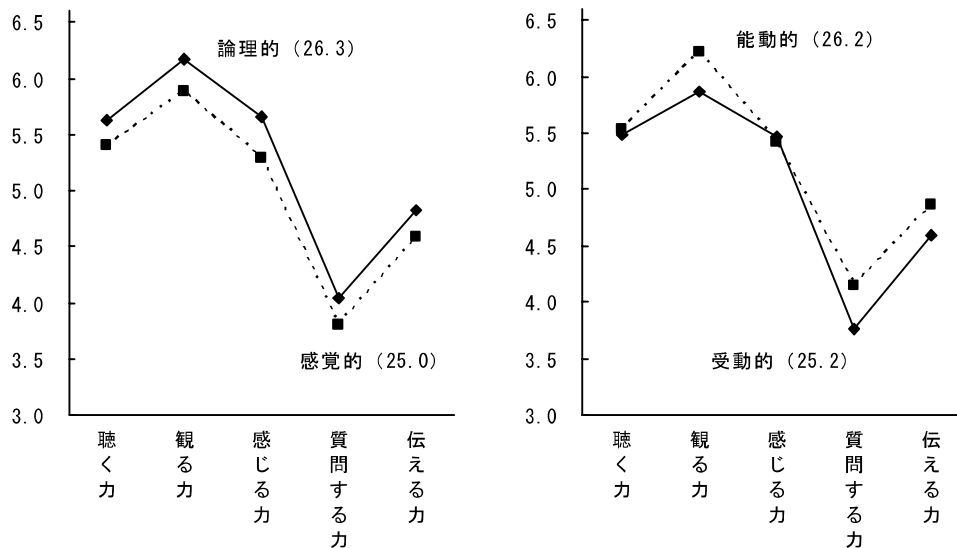


を持たない。この面があらわれて低い自己評価になっていると考えられる。

一方、受動的であるより能動的である方が、コミュニケーション能力の総合得点が高く、とくに観る力・質問する力・伝える力の差は大きい。まさに積極的に自分からアプローチするタイプかどうかでコミュニケーション能力が異なるということである。

上記二つを組み合わせると、論理的かつ能

図7 パーソナリティとコミュニケーション能力得点



注) 1. 図の ( ) 内はコミュニケーション能力総合得点  
 2. 回答者633人を、論理的 (281)・感覚的 (352), 受動的 (397)・能動的 (236) にそれぞれ区分して集計

動的タイプのコミュニケーション能力は高く、感覚的かつ受動的タイプは低いということになる。低いタイプに分類される学生には、日頃からよりよい人間関係構築への目的意識を持つこと、そして積極的にコミュニケーションをとることを意識して心がけることが必要であり、この点を自覚させる取り組みが有効と考えられる。

## 6. おわりに

社会人基礎力として注目されるコミュニケーション能力について、山口大学の学生へのアンケート調査に基づき5つの能力別に計測し、得点を算出した。結果として、5つの力それぞれ正の相関を持つこと、観る力・聴く力の得点が高く、質問する力・伝える力の得点が相対的に低いことがわかった。また、教員志望の学生、遠方から大学に来ている学生、スペシャリスト系の学生、論理的・能動的な学生の得点が高いなど、個人属性・意識による相違が計測された。

大学生のコミュニケーション教育が求められるなかで、まずは実態を把握することが重要である。本研究において、実際に大学生のコミュニケーション能力が計測されたことは、ひとつの成果と言えるだろう。大学のキャリア教育の基盤となる研究として位置づけられるものと理解している。

最後に、このテーマでの研究課題を2つ指摘しておきたい。ひとつは計測上の課題であり、いまひとつはコミュニケーション能力を高めるための教育的課題である。

今回はコミュニケーション能力を5つに細分解して、それぞれの能力を適切に示すと考えられる5つの質問を作成し、3段階で評価を求めた。これがすべての計測の基データであるが、この質問項目については、より詳細な検討が必要と考えられる。また、今回はすべて同じウェイトで得点化したが、コミュニ

ケーション能力を分解したときの重み付けをどのように設定するかの問題も残される。計測手法のさらなる検討は重要な研究課題でもある。

また、あくまで相対的なものではあるが、本調査では、ある属性・価値観を持つ集団のコミュニケーション能力が低いことが明らかになった。そこには地元出身、公務員志望、安定系の価値観を持ち、受動的・感覚的な性格を有する学生像がある。今回はどのような意識構造や背景からもたらされているのかという点まで踏み込むことはできなかったが、特定層の学生に対して効果的に教育を行うため、また、能力に応じた複数の教育プログラムの開発において、この問題の解明は極めて重要なテーマである。さらなる研究の発展が求められている。

(学生支援センター 助教授)

(キャリアカウンセラー)

- 1) 齋藤孝『コミュニケーション力』, 岩波新書, 2004では、「コミュニケーション力とは、意味を的確につかみ、感情を理解し合う力のこと」と定義して、「感情面での信頼関係を培うことのできる人は、仕事がスムーズにいき、ミスもカバーしやすい」とビジネス面での重要性を語る。
- 2) ここでの計測は、Office C&M『コーチング・メンタリングハンドブック基本編“本田勝嗣式”人材総合支援技術』, 2004によるコーチング・メンタリングの7つの原則のうち、コミュニケーションにかかわる5つの力に基づいている。
- 3) 総合科目「キャリアと就職」は、前期は山口大学吉田キャンパス(山口市)で3コマ開講、後期は常盤キャンパス(宇部市)で2コマ開講した高学年向け共通教育科目である。就職するにあたって知っておくべき経済・社会の基礎知識や考え方を理解し、自分の就職活動に役立てることを目的としている。この講義にはコミュニケーションをテーマとする授業

も行うが、このアンケート調査は、この回よりも以前に実施をした。

- 4) キャリア・アンカーとは、キャリア選択の指針を示すものであり、どんなに難しい選択を迫られたときでも放棄することのない自己概念と理解される。シャインは、キャリア・アンカーには「専門・職能別コンピタンス」「全般管理コンピタンス」「自律・独立」「保障・安定」「起業家的創造性」「奉仕・社会貢献」「純粋な挑戦」「生活様式」の8つのカテゴリーがあるとしている。エドガー・H. シャイン

『キャリア・アンカー—自分のほんとうの価値を発見しよう—』,(金井壽宏訳),白桃書房,2003.6 参照。

- 5) SP (サブパーソナリティ) トランプは、自己を理解し自己成長を図るパーソナル・ディベロップメントと、他者を理解し他者に対応していく態度や技法であるヒューマンスキルを学習していくための教材として開発されたもの。詳しくは YAO 教育コンサルタント <http://www.yao-ec.co.jp/> 参照